039648−000−6

特21−792

尊い日本

岡本　三山／著

M38. 3

BDA−0228

特21
792

はしがき

鹿を逐ふ獵師山を見ず、一國の人自國の尊を知らずして徒に他國の美を稱す、最も冷笑すべしと雖も而も其の愚は却て憐むべきなり。

我が大日本帝國山水秀絶にして土地肥沃、空氣澄清にして季候温暖、これ既に世界萬國に冠たるに、これを統御し給へる　皇室は、萬世一系天壤と倶に彊まり無く、これに事へ奉れる國民は、忠孝に篤くして節義を尚めり、されば開闢の始より今に至るまで、他國を威服せし例はあれども、曾て彼に侵略せられしことはなし、此の如きの國、天地の間何れの處にかこれあらん、蓋し其の比類でも見出し難かるべし。

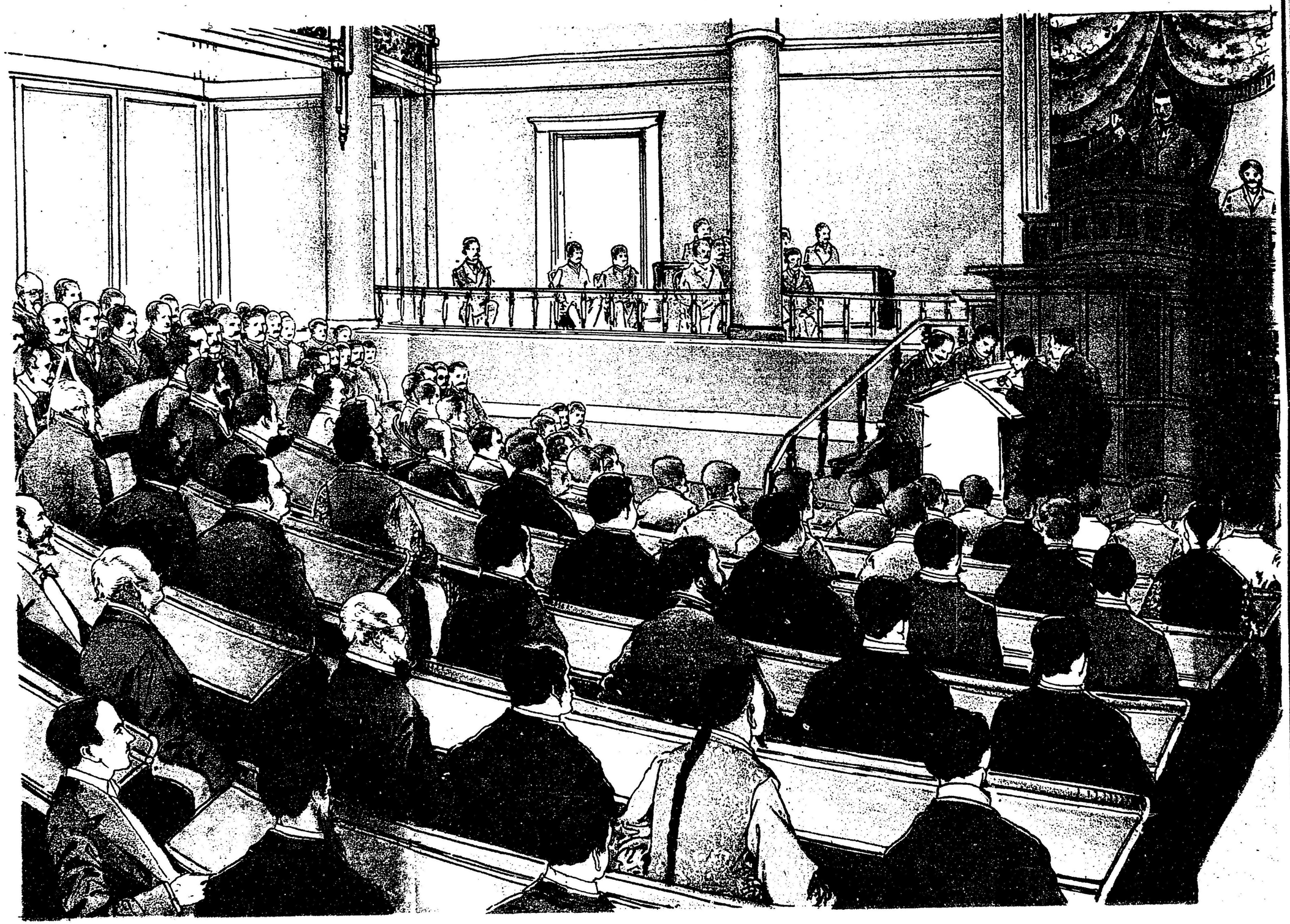
然るに我が國人にして歐西の所謂文明といふ者に心醉し、曰く彼の大都通邑、大廈櫛比して高樓并列せり、我これに及ばず、曰く彼の港灣、艦船群集して百貨輻湊せり、我これに如かず、曰く彼の國人、長大にして白皙儀容巍然たり、

明治
38 2 27
交内

我爭かこれに比するを得んと、嗚呼何ぞ其の所觀の皮相なる、此の如きものまゝこれ鹿を逐ふ獵師の徒と謂ふべきのみ。

三山君こゝに慨する處ありて此の書を著はされたり、知るべし其の學生の賞品に適することを、予も亦君と感を同じくするもの、乃ち刻成るに及び、喜びて一言を卷首に辨ず。時に明治三十八紀元の佳節窓前の寒梅蕾を破るもの三五、清香風に隨ひて室に入る。

森桂園



我爭かこれに比するを尋ぬるに、寧ろ可笑しき所見の定目とも、比の口

住めば都といふ諺もありまして。誰れでも、自分の住つて居る處は。たとへ山の奥又は海の邊でありましても。此樣な善良い處はないと思つて居りますから、世界一國をなして居りますものは、何れも皆、自分の國程、善良い國は、ないと思つて居るのであります。

處がある時、此の世界各國のお國自慢の人々が、計らず寄り集つて、互に自慢を始め、大議論を致しました。

先づ最初口を切つたのは、

支那人

「今日は、不思議に世界各國の方々が、會合致しましたが、諸君のお國も、追

〳〵と開けて來て誠に結構なことで。』と、申したまでは、善かつたが。

『此の分では、何時かは我中華の樣な、立派の國に、なることもありませう。』

と申したので、中にはクス〳〵と冷笑つて居る人もありましたが、多くの人の中には、其の無禮を咎めるもあれば。其の誤りを、敎えてやらうとする人もあり、其の人々の言語の中には、皆自分の國の、自慢が雜つて居るので、また之れを咎める人もあつて、議論が非常に、沸騰しましたので。

『諸君、諸君、暫時く靜にしたまへ。』

と高い處へ上つて、日の丸の旗を打ちふり〳〵申したのは、日本人でありました。

此の大勢が、聲を限りに騷いで居るのでありますから、なみ大底のことでは、靜まる筈もないのでありますが、なにはさて戰勝國の國旗を、高い處でふるのでありますから、何事であるかと皆は口をむすむで、其の方を見まするとと日本人は、再び語を續ぎまして。

『諸君、諸君は各自に、自國の御自慢をなされるのは、御尤のことでありますが、此の通りに、皆さんがた騷ぎになつては、治りがつきませぬから、此の中で議長を撰むで、各自の思ふ處を、充分に述べては如何でありませう。』

と申しまするとと。第一番に賛成をしたのは、英國人で。

『賛成〳〵、就きましては、戰勝國の日本人君が、其處に居るのを幸ひ、僕は議長に推選します。』と申しまするとと、滿場は大拍手大喝采で、之れに同意しました。其處で、支那を初め獨逸、佛蘭西、亞米利加合衆國、露西亞、伊太利等の、お國自慢の人たちは、爭つて議長を呼むで、發言を求めましたが。議長は。

『支那君は順序上、猶た說をお述べなさい。』

と申すので、支那人が、演壇に登りました。

『諸君、諸君はまた充分の學問をなさらないので、我中華のことを、御存じがないのでせう。元來中華の外は夷狄で、東夷、西戎、南蠻、北狄といつて。

東夷は、此處に議長を勸めらるゝ、日本君の如きも其の一つで、亞米利加、露西亞、佛蘭西、英吉利、獨逸、等の如きは西戎であります。』と申しますると。議場は再び沸騰致しまして。

『戰勝國たる、日本君に對つて、東夷などといふは、無禮の極である。』と申すものもあれば。

『論ずるに足らぬ愚說だ、此樣な馬鹿な說は、中止させた方が、時間つぶしにならなくてよい。』と申すものもあり。中には中止說に贊成して、演壇から、引き下さうといふ權幕の人もありますので。議長は。

『支那君の演說を、中止させやうといふ說に、贊成の方もありますから。中止及び繼續の兩說に就いて、決を取ります。……支那君の演說を、猶繼續させやうとなさる方は、起立を願ひます。……多數。』

と申しますると。『少數。』と申して、議長の採決に、反對する人も、澤山にありましたので。議長は。『それでは、指名点呼に致します。』

と申すので。書記官長は、鉛筆を取りまして贊否を標しながら。『露西亞君。』と呼びますると。露西亞人は。『反對。』

と申しまして、繼續說に反對します。次に又書記官長は。『朝鮮君。』

と申しますると、朝鮮人は。『贊成。』と申しまして、繼續說に贊成します。『獨逸君。』と申しますると。『反對。』と申し。『安南君。』と申しますると。『贊成。』と申しまして、互に贊否を答へましたが、点呼の結果は、僅かに一票の多數で、支那人の演說を繼續させることになりました。それで、支那人も、他國の惡口は。得策でないと思ひましたのか、夷狄の講釋を中止しまして。

『中華は文明の中心でありまして。』と今度は、中華の自慢を初めました。すると彼方でも此方でも。大分嘲笑の聲が聞えますので、支那人は憤慨の樣子で、

『自己が學問の不足を顧みずして、他人の言語を嘲笑するが如きは、我が聖賢の最も誡むる處であります。』と申しますると。獨逸人は。

『他人の國家を知らないで。自己の國家を誇るのは、聖賢の誡めにないのです

か。』と戯言ひますると。

『我が聖人孔丘は、二千余年の古へに於いて、中華以外の蠻國を說かれてあります。』と申しまする。

亞米利加人は又。『其の頃には、まだ我國はありませんでした。』と申しました。

『中華以外の蠻夷にあつても、能く聖人の教えを學び、忠君愛國より、仁義道德の法を知るものは、之を夷狄と曰はずとは、是れ亦聖人の實言であります。』と申して、日本及び米、獨、佛、英等は、夷狄の位置を脫して、大いに中華の文明に近いて居るとのお世辭を幷べる心組でありましたが、却つて益々嘲弄罵詈を以て迎へられまするので、此樣な野蠻人には、斯ふいふ高尙のことを、いつて聞かせても、迚も了解るまいと思ひまして。卑近なことから說き初めやうと致しました。そして。

『中華の廣大は、世界無比で、人口も亦、他列國の及ばざる處であります。』

『それも違つて居ると申したのは、英國人でありました。

『中華の屬領としては、滿州あり、蒙古あり、伊犂あり、西藏あり。東西南北共に、數千萬里であります。』

『地球の面積より大きい。』と申して笑つたのは、佛蘭西人でありました。『面積人口は幾何あります。』と戯言半分に尋ねたのは獨逸人でありました。

『此の廣大なる土地と、億兆の人口は、幾何ありまするか、迚も調べることは出來ません。』『調ぶつて居ないのは、本音でせう。』と申したのは、米國人でありました。『けれども、支那の面積人口は我輩の方で、大凡そ調べてある。』と申したのは、英國人でありました。

『中華の古國たることは、是れまた世界一番で。開國以來、幾萬年を經たか知れない。大古の帝王には、一人で一萬八千歲のお方が十二人あります。』と申しまするとと。『是れも他の國を知らぬ御自慢だ。』と埃太人は申しました。けれども、支那人は、矢張平氣なものでで。

『誠に他の野蠻國では見られない、聖人が八人ある。孔夫子は、其智慮遠大に

其學深厚』と申すと。

『もう澤山』と申したのは印度人で。英、佛、獨等の贊成を得ました。其處で議長は再び支那人の演說を中止するや否やを、議場に問ひまするとと、今度は滿場一致で、中止させることになりました。けれども、支那人は猶ほ降りませんので。

『滿場一致で、貴君の演說を中止することに決定したのですから、お降りを願ひます。』と議長は催促しました。議事のことを知らない支那人は、また何だか申したさうであつたが、印度人が發言の許可を得て、登つて來たので、漸く降りました。

印度人

印度人は、眞黑な顏に、目計りキヨロ〳〵させまして、議場を見渡しながら。

『只今支那君の演說中に、孔夫子などが出ましたが。人物の点からいゝますと、

我國には、釋迦如來があります。』

と申しまするとと。耶蘇教國の人等は、又々嘲笑しまするので。

『釋迦如來のことをいひまするとと、耶蘇教國の方は、お嘲笑になるであらうと思つて居りました。が、然し議長閣下の如き、日本君でも、矢張佛教國で、如來の加護をうけて居られるのであります。』

支那人は、今まで冷笑せられた、復讐だといふ樣な風で、日本君は、我が孔夫子の教へも、守つて居るよ。』と言語を挾みました、が、印度人は聞かぬ風で。

『支那君の口調でいへば、不動、文珠、普賢、彌勒、藥師等を初め、十六の羅漢より、五百の羅漢等がありまして。是等は皆、仁慈德惠の方々で、何れも歸依すべき佛であります。』と申しまするとと。那蘇教の人等は。『チヤ〳〵』と冷笑しまするので。『人物は此の位にして、多く論じますまい。が、我が國は熱帶にありますから、天の惠與を受けて、五穀、菓實は自然に熟り、山に象あり、河に鰐あり。象は捕へて耕作に使用し、鰐は殺して其の皮を錢入れ、烟草入

等に致します。』と申しますと。英國人は。『誠に善良いお國で。だから我が領國に致しました。』と戯ひまする。印度人は眞黑な顏を、眞赤にして、降壇りて仕舞ひました。次に登壇をしたのは、暹羅人であります。

暹羅人

『支那君、印度君の御演說に對して、西洋諸國の方等は、常に防害をなされますが。』

と申しまする。佛人は。『敢て防害は致しませぬ。』と申したので、暹羅人は、少しむきになつて。『殊に佛蘭西の方などは、我國憲までも、浸害せんとして居ります。』と申しまする。佛人も亦起立つて、何か申さうと致しましたので。議長は。

『暹羅君、御國の善良い處だけを、御演說なさい、他の國のことは、お止しなさる樣に。』と注意しましたので、佛人も其の儘、坐に附きました。其處で暹

羅人は。

『我が國は、日本君、及び支那君と共に、亞細亞州の獨立國であります。』

『朝鮮は如何に、土耳其は如何に、西比利亞は如何に。』と言語を挾むたのは、朝鮮であります。すると暹羅人は。『西比利亞は、露國の屬地であるから、本國は歐州であります。土耳其も亦其首府を歐州に設けあれば、眞正に亞細亞のみに、國をなすものといへませぬ。朝鮮の如きに至つては、日本の庇護の下に、余命を保つて居る、半屬國といつてよいのである。』

と申しまする。朝鮮人は非常に立腹して、眞赤になつて居る。佛人は。『大層お立派なことで、今にた國も亦私の方で庇護してあげませう。』と冷笑しました。

が、暹羅人は、平氣なもので。『元來、我が暹羅國は、戰勝國たる日本君と、同一人種である。昔し我が國が一度乱れたことがあつた時に、日本の名將山田長政君は、大阪城の落ち武者を率ゐて來り、遂に我が國王とならせらる。』と申しまする。

『すれば、君の國も日本の屬國かねえ。』

と申したのは、英國人でありました。

『決して屬國でない、けれども同一人種であるのです。』と猶言語を續けやうと致しましたが、各國人から、終結々々といはれましたので、終に降りて仕舞ました。其の時朝鮮、ばるま。波斯、あふがにすたん、べるぢすたん、あらびあ、ひりつぴん諸島等は、發言を求めましたけれども、發言の權利がないといふ、滿場の決議で、登壇は出來ませぬ。其處で、漸く許可を得たのは、土耳其人であります。

土耳其人

『我が國人こそは、實に日本人と同一種族であります。其の証據は、戰爭に強いことでも知れるので、亞細亞州より、歐州に攻め入つて、都をなせるものは實に我が國の外にはありますまい。』と述べますると。『露西亞君に負けた手際な

どは、感心なものでした。』と惡口を申したのは、獨逸人でありました。すると土耳其人は。『露西亞君は全体詐欺的の人だから、多くの露探を放つて我將校を反間せしめ、我が將校は、互に相疑つた爲に敗れたので、敢て我が國人の弱いのではありません。』と申しますると。『負けても強いよ。』と冷笑したのは、佛蘭西人でありました。土耳其人は、演壇の上から、ヂロリと佛人を悵望めて。

『佛蘭西君の如きも、其の皇帝ナポレオンに率ゐられた、五十五萬の大軍は、露都モスクバで、お負けになつたではありませんか。』

と切りこむたので、流石の佛蘭西人も赤面して、俯いて仕舞ました、土耳其人は得意になつて、今度は獨逸人の方を睨めて。

『普魯西君が、また獨逸君の、一つ王國で墺太利君に仕へて居つたときに、我が國は度々墺匈國に攻め入つたから、普魯西君は墺太利君を、獨逸國から分離することが出來たので、普魯西君の、獨逸に君臨することを得たのは、我が土耳其の、お蔭といつても宜しからうと思ひます。』

と申しますると、傲慢な獨逸人は、大さう立腹の樣子であつたが、前に惡口をいつたので、口を開きませぬ。すると露西亞人は。

『獨逸人の方に向つて、野蠻人は對手にせぬがよい。』

と申しましたので。

『野蠻と、野蠻は、よい相撲だ。』

と英國人は笑つた。露國人は又。

『何が野蠻と、野蠻であるか。』

と英國人を咎める。亞米利加人は又。

『でも英吉利君の、いふ通りに違いないからなあ。』

と露西亞人に戯ふ。露西亞人は、益々怒りだす。議場は、又々大さうな、騒動になりました。議長は。此の樣子を見まして。

『暫時く、休憩みます。』

と申して入つて仕舞ましたので、議員も續々退場しまして、後は大風の吹き去つた後の樣になりました。

休憩後

暫時く休息しましてから、議事は再び開かれまして、矢張土耳其人は、演說を續けました。『前へにも、我が國の强いことを述べましたが。佛蘭西君は、負けても强いかとのことであつたが。』と前に佛人を、赤面させたので、猶くり返へして。

『負けても强い、一つの証據を擧げませう。其の時我がチスマン、パシヤは、孤城に援兵なきの軍を以て、露の大軍を引きうけ。露國は、全力を盡して、攻めましたけれども容易に、落し得なかつた。』露西亞人は。『チスマン、パシヤは、遂に捕虜になつたでないか。』と申しますると。土耳其人は。『固より、寡兵を以て、大軍に包圍せられたのだから、遂には力屈して、捕虜となつた。が、然し其の驍勇絕倫なことは、どうしても、異論はありますまい。』

と申しますると、露西亞人は又。『して見ると、露國は、智勇兼備の爲に、貴國に勝つたのだ。』と申しましたので。議場は又も、騷がしくなりました。其處で議長は、土耳其人の演說を中止することを、議場に問ひましたが、大多數で、中止させることに決定しました。

露西亞人

露西亞人は。『漸く私しの番が、回つて來ました。』と冒頭を述べまして。

『支那君初め印度君、暹羅君及び土耳其君等の、亞細亞人即ち黃色人君の、御自慢のお話しを、澤山に拜聽しました。が、』

とがの字に力を入れて。再び。

『が、元來、黃色人は、我輩等の白色人よりは、一層下等なもので。是れは、犬や猫が、人類より劣等である如く、天から授かつて居るのであります。』

と申しますると。『ヒヤ〳〵ヒヤ〳〵。』と喝采するものもあれば。『ノー〳〵ノー〳〵』といふものもあり。議場は又々破れんばかりの大騷動になりました。暫時くたつて、大分靜まりましたので、露西亞人は、語を繼ぎまして。

『露西亞人は、白人種の中でも亦一層上等な人種であります』と申しますると。今度は、ヒヤともノーとも申すものがなくて。彼方でも、此方でも、クス〳〵と、笑つて居るもの計りでありました。けれども、露西亞人は、傍若無人で。

『我が國は、建國以來一千余年の古國で、世界中多く其の比を見ないのである。』

と申しましたので。支那人や、埃及人は。

『チヤ〳〵。』と呆れて居りました。『其の間の帝王は又、英雄豪傑のみで、殊にピヨトル大帝の如きは、世界に於いて、空前絕後の皇帝でありませう。』と申しまして、キヨロ〳〵と、場内を見回し、甚だ得意な樣子で。『アレキサンドル一世の如きも亦、他國に於いて見られぬ英傑で、先程土耳其君も述べられた通り一時歐州の天地を震動した、ナポレオン、ボナパルトが、五十五萬の大兵を以

て、攻め入つてさへ、我がアレキサンドルの爲には、一擊の下に破られて、逃げ歸りました。』と申しまして、日本に負けたことなどは、さつぱり知らぬ風で。

『其の他建國以來、戰へば勝ち、攻むれば取り、未だ曾て破れたことはありません。』

余りの鐵面皮に、議長の日本人も、思はず議長席で、笑ひ出しました。

『露西亞君は、遠視眼だから、余り近い處は見へないのであらう。』と申したのは、亞米利加人で。『古へ鐵木眞に、征伏せられたのは、負けた中ではありませんか。』と申したのは、滿州人でありました。

露西亞人は、大分風色が惡くなつたので。歷史談を止めて、地理上から說き初めました。土地の廣大なことに至つては、實に世界中其の比を見ない。前へに支那君は、支那は世界第一の大國だ、とのことでありましたが、其の面積から見ますると、我が露西亞國の半分位でありませう。』と申したので、

『我が國の面積を知れりや。』と申したのは、英國人でありました。

『殊に我が露西亞國は、世界の北方に位して居るので、一年の半は氷雪に埋れ一朝外國と事あるに當つては、天然の要害となり、ナポレオン帝の破れたのも畢竟此の爲でありませう。』と申しますと、今までナポレオンのことが出るたびに、悔しく思つて居りました、佛蘭西人は。『兵の强いのでないがねえ。』と申しました。『君主政治は、野蠻の國に行はれて居りまするが、文明國に於いて、君主專政を行つて居るのは、我が露國の外にありますまい。』

と申しました。『それが已に野蠻でないか。』

と申したのは、佛蘭西人で。

『支那君の中華說と、好一對だ。』

と申したのは、亞米利加人でありました。

『我が露國の兵數は、平時でも百萬以上もあり、戰時となつては三百萬以上もある。』

獨逸人は、何か癪にさわつたらしく。『余り强くはないがねえ。』と申しまする

て、攻め入つてさへ、我がアレキサンドルの爲には、一擊の下に破られて、逃げ歸りました。』と申しまして、日本に負けたことなどは、さつぱり知らぬ風で。

『其の他建國以來、戰へば勝ち、攻むれば取り、未だ曾て破れたことはありません。』

余りの鐵面皮に、議長の日本人も、思はず議長席で、笑ひ出しました。

『露西亞君は、遠視眼だから、余り近い處は見へないのであらう。』と申したのは、亞米利加人で。『古へ鐵木眞に、征伏せられたのは、負けた中ではありませんか。』と申したのは、滿州人でありました。

露西亞人は、大分風色が惡くなつたので。歷史談を止めて、地理上から說き初めました。土地の廣大なことに至つては、實に世界中其の比を見ない。前へに支那君は、支那は世界第一の大國だ、とのことでありましたが、其の面積から見ますると、我が露西亞國の半分位でありませう。』と申したので、

『我が國の面積を知れりや。』と申したのは、英國人でありました。

『殊に我が露西亞國は、世界の北方に位して居るので、一年の半は氷雪に埋れ一朝外國と事あるに當つては、天然の要害となり、ナポレオン帝の破れたのも畢竟此の爲でありませう。』と申しますと、今までナポレオンのことが出るたびに、悔しく思つて居りました、佛蘭西人は。『兵の强いのでないがねえ。』と申しました。『君主政治は、野蠻の國に行はれて居りまするが、文明國に於いて、君主專政を行つて居るのは、我が露國の外にありますまい。』

と申しました。『それが已に野蠻でないか。』

『支那君の中華說と、好一對だ。』

と申したのは、亞米利加人でありました。

『我が露國の兵數は、平時でも百萬以上もあり、戰時となつては三百萬以上もある。』

獨逸人は、何か癪にさわつたらしく。『余り强くはないがねえ。』と申しまする

と。『我がコサック騎兵の如きは、天下に敵なきこと、世界各國の認むる處であります。』

と鼻を高くしますると。

『日本騎兵に、滿州で破られた、手際などは、我輩の實地に拜見した處であります。』と冷笑したのは、支那人でありました。

『殊に帝室の尊嚴。人民の忠勇』

と說きかけますると、議場の諸方から。『感心なものだ。』とか。『皇帝の暗殺は、露國の專賣だ。』とか。『露人の鐵面皮に敬伏した。』とか。『支那人以上だ。』とか、種々の惡評が起りまして、誰れも演說を、聞くものがなくなりましたので、流石の露國人も降壇しました。

獨逸人

普魯西人は、獨逸國を代表しまして、演壇に登りました。其の傲慢の顏つき、

威張つた態度。唾でも吐きかけて遣りたい樣であります。

『諸君、滿場の諸君。歐州に於いての古國、といへば、我が獨逸國の、右に出づるものは、ありますまい。』と申して、希臘の方を睨み、態とらしく咳きばらひを致しましたので。伊太利人は、奮慨に堪へぬといふ風で。『希臘、羅馬は如何した。』といひますると。已に亡びた國、又は目にも入らぬ樣な、小さな國は論ずるに足らないです。若しも是れ等を古國とすれば、支那、埃及の如き、野蠻國も、古國の內に、入れねばなりませぬ。』

と傍若無人にいひ放ちましたので、各國の人々は、前へに支那人に加へた樣な、惡罵を以て、議場を充たしました。傲慢無禮の獨逸人も、之れには余程閉口したものと見へ、暫時は默つて居りましたが。議場の大分靜まつたのを見まして、

『元來白人種は、人類最上の人種でありまするが。黃人種とて、日本人の如きもあれば、敢へて劣等の人種ではありません。』前の言語とは、緣もゆかりもないことを申し出しました。之れは獨逸人の、常に行ふ狡猾手段で、前に他國の

惡口を申して、演說を中止せられた、支那人の樣な目に、會はふとしたので、之れを見て取つた、獨逸人は。白人種を賞め、黃人種までも劣等でないといつて、た世辭を幷べ、議場の人望を、恢復しやうとしたのであります。そして議場の、大いに靜肅になつたのを見まして。安心したらしく。『が、露西亞君がいはれた如く、露國人計りが、最上の人種といふことはありますまい。』とそろ〳〵他國の惡口を始め。『同一の白人種で、別段優劣はありますまいが、敎育のしかたで、優等のものともなれば、劣等のものともなります。我が獨逸國は、こゝに見る處があつたので、敎育を隆盛にした結果で、文字の讀めないものは、全國中に一人もありません。』と申しましたので。佛蘭西人は。『生れた直の、赤子でもねえ。』と、皮肉なことを申しました。『殊に前世紀の始めから、學者の淵叢といへば、我が國都ベルリンであるといふことは、滿場の諸君も、た認めになつて居ることでありませう。』と申しましたが、之れには別に、反對をするものもありませんでしたから。獨逸人は益々得意になりまして。『ですから、商業

でも、工業でも、農業でも、宇內各國に於いて、我が獨逸に及ぶものはありません。』

と自慢をしますると。英國人は。

『又々始まり』と申して、雜ぜ返しますると。佛國人は。『東西〳〵。』と申して、之れも演說の、防害をしまするので。『英國の海軍と、我が獨逸の陸軍は、世界に誇るべきもので。』と、又も英國人の、意を迎へそして又。『曾て佛國は。我が軍、主として我が陸軍の爲に、其の首府パリーにまで、攻め寄せられ、城下の盟をさせられました。』と、そろ〳〵我が田に、水を引きかけまするので。『ナポレオン一世の爲には、其の反對で。』

と佛人は、嘴を入れました。『元來、露西亞の、ナポレオンに勝つたのも、其の實は、我が獨逸國の反應の爲で、決して露國のみの力で、勝つたのではありません。』と申しますると、亞米利加人は。『反復常なきは、獨逸の特色。』と申しましたので、流石の獨逸人も、ギヨッと致しました。が、傲慢猾智の彼れは、態

と知らぬ樣子をして、『新戰勝國日本君の如きも、我が陸軍を模範としたので、斯くも强大なものとなつたので。』『日本國の海軍は、如何に。』と申したのは、英人でありました。『日本國は又、高等の學問、技術、商工、業のことより、普通教育の制度、司法、警察、行政のことに至るまで、皆我が獨逸國を、模範とするので。彼の通り、何もかも發達したのであります。『日本國の人才は、獨逸國計りに、留學せない。』と異口同音に申したのは、亞米利加、英吉利、佛蘭西等の人でありました。『獨逸國中の、獨逸ともいふべきは、普魯西であります。』『オヤ〳〵、まだ有るのか。』と申したのは、支那人で。『もう澤山。』と申したのは、露西亞人でありました。『三十有余侯伯に、分離せし、獨逸國を統一し。數百年來の舊家たる、墺太利家を排斥し。短日月の間に、世界第一等の文明國、最上の强國としたのは。』『オヤ〳〵。』と申したのは、英國人で。『已惚の極。』と申したのは、佛國人で。『ちと僕の國へも、遊びに來給へ。』と申したのは、亞米利加人でありました。が、何と申されても、平氣なもので、何處を風が吹くのか、

といつた樣な、相變らずの傲然たる面つき。『我がウヰルヘルム皇帝と、之れを助けた、絶世の英雄、鐵血宰相ビスマークでありますモルトケ將軍の、軍略に至つては、千古無比であります。』

『もう聞き飽きた。』

と露西亞人が申せば。『大賛成。』と申したのは、佛蘭西人で。他にも多くの賛成があつたので、遂に降壇することになりました。此の時、丁度正午前であつたので。議長は。

『もう正午でありますから、議事は、御飯後に致します。』と告げまして、皆は一時退場致しました。

午後

午後の一時に再び開會致しまして、第一に發言の許可を得ましたのは佛蘭西人でありました。

佛蘭西人

佛蘭西人は黒羅紗の一本綾で、念を入れた仕立の燕尾服を着て、頭には、コスメチックとかいふものを塗り、履の尖までも、ピカ〳〵光らせて、俯けぬ程のハイカラを着け、大さう氣取つて、登壇した。『オホン〳〵。』と三四度も咳き拂ひをしまして。靜かにコップの水を呑み。『諸君。』といふ聲音にまで、物体をつけて。『世界第一の華麗の都は、何處でありませうか。申すまでもなく、我が國都パリーでありませう。』『獨逸君の爲に、城下の盟をさせられた、名譽の都府ですねえ。』と冷かしたのは、朝鮮人であつたので、皆は却つて、朝鮮人の方へ目を集めました。『市街の華美は申すまでもなく、交通の便、衛生上の注意、教育の完美、商工業の發達、文學の隆盛、人士の高尚、婦女の秀麗。』と限りもなく、并べ立てまするので。『もうよく判然りました。』と申したのは、獨逸人でありました。『パリー以外にも亦、リヨン等の著名の都府があります。』と申しかけまし

たが、余り熱心に、聞いて居る人のないのを見まして。歴史的のお話しに移りました。『古國といふ點からいひますると、又我が國も他國に讓らないです、獨逸君とは、今でこそ敵國の樣になつて居りまするが、元は一ヶ國で、それから分離れて、兄弟の如くになつたことは、獨逸君は固より、滿塲の諸君も御存じのことでありませう。』と申して一寸鼻の下の、花車な鬚を捻り。

『歴史的の人物は、ナポレオン、ボナパルトであります。露西亞君や獨逸君は、ナポレオン一世に勝つたとか、追ひ返したとか、いろ〳〵の御自慢でありますが、皇帝の爲に破られたことは、數へきれないので、只の一度だけ、お勝利であつたことを、御自慢なさられはならぬ樣な、御境遇で、誠に早やお氣の毒さまで。』と何處までも、氣障な、いひ振りでありますので、皆は欠伸などを、始めました。けれども、佛蘭西人は、其れには、氣がつきませぬのか、

『殊に現時の我が國は、政体の異なることで、君主などいふものはない、國内第一等の人物を擧げて、大統領とし、之れに政治を委ねて、諸般の事務を採ら

しむ、之れを共和政治といふ。』と共和政治の、講釋を始め出したので。欠び、伸び、坐睡の人が益々多くなりました。すると亞米利加人は。

『君、佛蘭西君、滿場を見給へ、場内の靜かなのは、君の演說を、感心して聞いて居るのではないよ。それから、共和政治の、講釋なら、僕が演べるのが、至當であらう。畢竟、貴國は、我亞米利加合衆國の疑似に過ぎないのだからなあ。』

と注意しましたので。『然らば。』と申して、また何だか申す樣子であるので。議長は。『大分皆さん、お疲れの樣ですから、暫時く休息しませう。』と申しまして、休息することになりました。

午後休憩後

午後の休憩後には、歐州の各國人が、互に發言の許可を爭ひましたが、ルマニア、セルブヒア、バルガリア、モナコ、瑞典、那威、丁抹等は、發言の權利が。

ないものと決定められました。只是等の國々は、瑞西人を代表者として、出すことが出來るを得といふ、但し書きを置かれまして、總て自國の善良い處は、瑞西人に依賴すること丶なりました。それから又、和蘭、白耳義も、一ト纏めにして、和蘭人が、演べること丶なり、且つ余り澤山に、說がないので少時間で結了するからといふので、和蘭人が、登壇することになりました。

和蘭人

和蘭人は、至つて謹愼な、態度で。『我が國の如き小國は、世界各國の諸君に對つて、誇るに足るものは一つもありません。』ノー〳〵。』と申すものが、方々にありました。『然し、白耳義君からも、依賴せられた件もあり、旁々暫時の間、お耳を汚したと存じます。』『謹聽々々。』

といふ聲が、諸方に起りました。『就きましては、白耳義君の方から、少々申し述べまするが。同國の、誇るに足るものは、國際公法學の。發達して居ること

であります。獨逸君は、學者の淵叢は、伯林の他にない、とのお說を、演べられましたが。國際公法學者計りは、白耳義國に、一歩をお讓りになるのが、至當であらうと、我輩は信じます。』『然り〳〵。』と申したのは、佛蘭西人でありました。『是れには、大きに理由の御座りますることで。大國强國等の方々では、理が非でも押し通す場合がありまして。』『決して無い。』と申しましたのは、露西亞人であります。『いや、屹度あります。東洋の平和を保つ爲めとか、何とかいつて、日本國をして、遼東半島を還附せしめ、直に之れを横奪せるが如きは、其の一例であります。』と申しますると。露西亞人は、甚だ輕蔑した風で。

『其れは遼東の一部旅順を借りただけだ。』

と横柄に申しますると。

『其の上滿州、朝鮮等を理不盡に、併呑せんとして、遂に任俠正義の、日本君の爲に、膺懲せられ、また立つ能はざる樣なめに、會はされたのは、御記憶になりませんか。』と申されたので、露西亞人は、閉口して仕舞ました。『其樣な場

合に、日本國の如き、忠勇の軍隊と、富力がありますれば、何も申すことは入りませぬが、白耳義又は和蘭の如き、全國の人口僅に二百萬や、三百萬の國では、斯る横着なる國には、迚も敵對することが出來ません。』『同感々々。』と申す聲が、諸方に起りました。『其處で、事件の起りました度に、其の理非を研究し、之れを萬國に訴へて、其の輿論を需むるより、他に策はありません。是れ白耳義の如き小國にては萬國公法學の、發達せる所以であります。』

と議論を結び。更に。『白耳義、和蘭等は、斯る小國を以て、斯る大國の間に、介在して居るのでありますから、日夜枕を高くして、寢ることは出來ませぬ。それで其の勤勉なことは、世界に誇るに足るものがあるかと思ひます。現に和蘭の如きは、海面より低き處に於いて、農業を營み、生活して居るのを見ても、其の勉勵なる、國民であることは、知れるであらうと存じます。』と申して、壇を降りましたので、其の次に登壇しましたのは。

であります。『我輩は、斯る小國人でありながら、他の歐州各小國の代表者となつて、登壇することを得ましたる、名譽の程は、感謝致します。』と冒頭をして。『只今和蘭君も、演べられた通り。吾曹の小弱國に於いて、自負すべきもの、有らふ筈はありません。が、われ〳〵小弱國のもの等は、斯る大會の席上に於いて、斯る言論の、自由を得たるを、喜欣ぶと同時に、諸大國諸君に對つて、大いに考へて貰ひたいことを、注意したいのであります。』同感〳〵。』と呼ぶ聲は、諸小國人から出ました。『現に瑞典、那威兩君の如き、丁抹君の如きは、主として、露、獨兩大國の、考慮を煩したい。プルガリア、セルビア、ルマニア、モナコ等の諸君の爲には、士耳其君の一顧を願ひたい。』と申しまして、亞細亞諸邦人の方に、眼を注ぎ。又亞弗利加諸國人の方に、眼を轉じ。『我輩は、歐州小國の、代表者ではあるが。我が歐州の大强國は、亞細亞、亞

弗利加の、諸邦國に、干渉することが多いですから、是等の爲にも、一言演べて置きたいのです。』

と一寸議長の方へ向ひまして。亞細亞諸國は、幸に義俠なる、日本君が居て呉れますから、大いに安心する事も出來ますが、亞弗利加諸君の如きに至つては、實に心細いです。去りながら、是れは吾曹の力では、迚も及ぶ處でないのであるから、只大强國諸君に對つて、一考を煩はしたいといふに、止まるのであります。』

と演べますると。『賛成々々。』と申すもあれば。『ヒヤ〳〵。』と申すもあり。又、拍手喝采するものもあつて、場内は、一時破れさうでありました。瑞西人は、コップを取つて、靜かに咽を濡ほし、場の靜まるのを待つて。『其處で、我が國は、赤十字社なるものを起して、幸に世界大强國の賛成を得まして、是れが爲に、多くの生靈を救ふことが出來ましたのは、聊か誇るに足るものかと存じます。』と申して、又も喝采せる、場内を見渡しまして、

『我が國の雪崩、山形湖狀の奇なる如きは、諸君は既に、御存じであらうと思ひますから、敢て申しますまい。』と大拍手、大喝采の内に、降壇致しました。

西班牙人

次に登壇したのは、西班牙人で。最初調製した時には、金をかけたらしいですが、今は見る影もない古洋服を着て、至つて元氣のない樣子で。『我輩は、葡萄牙をも代表して、一言演べませう。我が國も、一時隆盛であつた頃は、隨分世界各國の、諸君に對つて、誇るに足る國でありました。が、今は見る影もない樣になりました。けれども、コロンバスをして、米州を發見し得せしめたのは、我が國の力で、若しも我が國母の、コロンバスを助けることがなかつたならば、幾十百年の後まで、發見せられなかつたかも知れぬのであります、隨つて合衆國の如きも、今日の如き發達は迚も出來なかつたでありませう。』と亞米利加合衆國の人を睨みまして。『して見ると、キユバのみならず、米洲の諸國は、我が

國に對して、少なからず恩惠を受けて居るであります。それを初めは、本國の世話になつて置きながら少しく自由の利く樣になると、獨立など〻以ての外のことを思ひ立つ計りでなく、遂には我が屬島たるキユバにまで謀反を勸め、剩さへ我れに戰端を開いて、フヒリツピンを奪ひ、などするものがあつたので、現在の樣な境遇になつたのであります。と申しますると。『日本君の、臺灣に於ける樣な、善政を施せば、好むで斯ることを、なすものはありません。』と申したのは、ヒリツピン諸島の人でありました。『よしそれは、本國に多少の無理は、有つたにした處が、最初の本入れといふものは、あだでは出來るものでありません。』

『今となつては、泣きごとも、追ひ付きますまい。』とキユバ島の人は、冷笑しました。『遂には、本國内にまで、獨立を謀るものが出來て、葡萄牙君なども、到頭分離して仕舞ました。』『オヤ〳〵。自慢の代表者は、却つて攻擊を始めた。』など〻、皆で笑つたので、元氣のない西班牙人は、コソ〳〵と壇を下りて仕

舞ました。

希臘人

小骸ながら、キリッとした風をして、チヨコ〳〵と登壇したのは、希臘人で。氣の短かさうな、早口で。露西亞君、獨逸君、及び佛蘭西君なども、建國以來千年とか、千幾年とかを、經過した古國であるなど、國の古い御自慢で、殊に獨逸君の如きは、我が國を目して、眼にも入らぬ小さな國だとの、惡口でありましたが、小さくても、古國は、古國に違ひありません。』と露、獨佛等を睨みまして。『我が國から見ますれば、千年やそこ等の年月は、ついこの間の樣なもので、國を建てゝから、僅に千年位かと驚く程であります。けれども。』と少し、萎れまして、

『正義の爲に起したる師が、土耳其君の爲にさへ、破られる樣では、何をいつても、追付きませぬ。』と希土戰爭に破れて、自國の意見の通らなかつたことを

慨いて、降壇しました。

伊太利人

『大分古國談が、盛んでありましたが、我が伊太利建國こそ新しいが、羅馬帝國は、又誇るに足るの古國であります。が、我輩は古國談は止めまして、我が國の他には、擬似の出來ない点を、擧げて見ませう。』

と得意な顏で、場内を見渡しまして。第一は、宗敎の本山であります。一時羅馬法王は、帝王の帝王であるとまで申されましたが、此の法王の居所は、實に我が帝都たる、羅馬府であります。』と申しますると。印度人は。『宗敎とは、耶蘇宗計りでありません。』と申しました。『第二は氣候の温和なることで、冬寒からず、夏暑からず、實に歐州の樂園といはれるだけの、價値はあります。』亞米利加人は。『亞米利加には、もつと温和の處がある。』と呼び。大洋洲の人は。『大洋洲に來て見給へ。』といひ朝鮮人は。『日本國に行つたことがありますか。』と尋

ねました。けれども、伊太利人は、是等のことは、聞かぬ風をして。『第三は、風景の、絶佳なることであります。』

と申しましたので。朝鮮人は再び。『日本國とは、比べものにはなりませぬよ。』

と呼びました。伊太利人に次いで、登壇しましたのは。墺地利人であります。

墺地利人

『我輩は、勾牙利君をも、代表して申しませう。當議會が開けましてから、支那君を初め、露、獨、佛の諸君より、希、伊の諸君に至るまで、大分古國談がありましたが、國の古い御自慢も、さることながら、王朝の古いことは、我が墺地利王朝の、右に出づるものは有りますまい。』と申したので。『日本の歴史を、讀みましたか』と呼むだのは、又も朝鮮人でありました。すると伊太利人は。『朝鮮君は、日本國の半屬國に、ならうとして居るので、大分日本君を、お賞めになります。』と自分の演說中に、朝鮮に申されたことを、根に持つて、朝鮮人を仇

にしますると。朝鮮人も負けては居ず。『何も、日本を、賞める譯ではありません。歐洲の諸君は、歐洲以外のことを知らずに、獨りで善がつて居るから、我輩は片腹痛さに注意したのです。』と申しますると、又も伊太利人は、何か申さうとする。議事は脇にそれて、墺地利人は演壇で、手持ち無沙汰で居りまするので、議長は、伊太利人や朝鮮人に注意して、爭論を止めさせました。其處で、墺地利人は、再び口を開きまして。『勾牙利人の勇敢は、世界に無比であらうと思ひます。』迚も日本人には及ばぬ。』と申したのは、支那人でありました。『曾て鐵木眞の、歐州諸國を征伏した時に、勾牙利人の爲には、擊退せられました。』『日本も亦忽必烈が十萬の大軍を、鏖殺しましたよ。』と申したのは、又々朝鮮人でありましたので、『又日本か。』と伊太利も亦申しました。けれども、墺地利は、頓着なく。『土耳其人の、屢、我が國に侵入せし時、能く之れを、擊退したのも、亦勾牙利人でありました。又曾て普魯西と事を構へし時、マリア、テレサを救けたのも、勾牙利人であります。』お國に對つて、反旗を飜したコースト

も亦、勾牙利人でありましたねえ。』と申したのは、佛蘭西人であります。『何にもせよ、勾牙利人は、強いに違ひはありません。』といひ棄てゝ、墺地利人は壇を降りました。歐州人の最後に登壇したのは。英吉利人であります。

英吉利人

仕立おろしの、セビロの洋服を着て、頗る活潑な態度で。『單に海王といへば、我が英國であることは、諸君もお認めでありませう、だから海軍にしろ、商船にしろ、其の頓數の多いことは、比肩すべき國もありますまい、啻に比肩することの出來ぬ計りでなく、我が國の半に達した國はありますまい。』と申して、獨逸人の方を眺め。『商工業が發達して、世界一番である、とかいはれた、獨逸君でも。我商船と比較べては、お話しになりますまい。』と滿場を見渡し。『各國の諸君は、各自に、自國は世界隨一なりと、いふ樣な御口吻でありまするが、我が英國海軍の強大と、商船の多數にして、世界第一等である、と申すことに

就きましては、御異論はありますまい。』

と念をおして。『次に申し上げたいのは、國の廣狹であります。支那君も、露西亞君も、共に世界第一の大國であると、いはれましたが、支那國の面積は、四百余萬平方哩で。露西亞君のは、八百余萬平方哩であります。尤も、露西亞君も、支那君の二倍大なることは、申されてありまするが。我が英國は、一千百余平方哩で、殆んど右二國の和に、近いのであります。』とコップを取つて、一寸口を潤し。『諸君、世界第一の大國は、英吉利であるといふことも、御異論はありますまい。』

と再び念をおし。『人口の點からいひましても。支那國は四億で。露國は、一億五千でありますが。我が英國は、四億五千萬でありますから。是れも亦天下第一であるといふことに、異論はありますまい。』

と又も念をおしまするとと。露西亞人は、いま〳〵しいといふ風で。『印度君の樣な、眞黑なものまでを、數へてねえ。』といひまするとと。英人は、黑くても、白

くても、一人は一人だ、といふ樣な顏をして。『人種の雜多なることは、露西亞國には、迚も及びません。』と一寸露西亞人を、戯言つて置いて。『次に世界第一を以て、誇るべきものは、我が國都ロンドン市であります。』『馬糞を以て、有名だねえ。』と申したのは、佛蘭西人でありました。『佛蘭西君の如く。市街が華美だとか、衛生が行きとゞいて居ると、小さなことまでの、自慢を致しますと、何橋が長いとか、何塔が高いとか、實に限りもありませんから、略しまするが。一市の人口、五百萬人といふに至つては、全國を擧げて、二百萬や、三百萬の人口の、御國の人には、思ひもよらぬことでありませう。』と申しまするとと。『四百九十九萬余人までは。困窮な、勞働者でありませう。』と申したのは。白耳義人でありました。『ロンドン市及び其附近の、都市を合して、家屋の鱗次せること、方五十哩であります。出入の船舶は、テームスの大河を濁水たらしめ。工場の烟突は、天を覆ふて、晝猶暗からしむるのであります。』と申しまするとと。『一尺先きも見へない深霧も、烟突から出ますか。』と眞面目に

聞いたのは、西比利亞の人でありました。『是を以ても、商工業の、盛大なことは知れまするが。隨つて銀行業などの、隆んなことも、矢張世界第一でありませう。殊にイングランド銀行に至つては、世界各國の、銀行の銀行といはねはなりませぬ。』

『建物は、古いですねえ。』と申したのは、亞米利加人でありました。『建物といひまするとと、我が國會議事堂に若くものはありますまい。』內部の不完全は、敢ていはずかねえ。』と申したのは、佛蘭西人でありました。『水晶宮の如きに至つては、御批評も出來ますまい。』なか〳〵立派です。名前だけが。』と冷かしたのも、佛蘭西人でありました。『猶此の他に、特筆大書して欲しいものは、我が政體の完美と、皇室の尊嚴であります。』『日本の政體及び皇室を、御存じですか。』と申したのは、朝鮮人でありました。『墺地利君は、王朝の古いことを、演べられましたが、我が英國の皇室とは、比較べものになりますまい。』朝鮮は又。『其の如く、貴國のも亦、日本の皇室とは、比較べものに、なりますまい。』と申し

ました。『我が英國は又、歴史あつて以來、未だ曾て、他國の侵畧を、うけたことはありません。露西亞君の如き、佛帝ナポレオンを、擊退したとの、御自慢でありますが、兎に角一時國都を、占領せられたでありませう、然るに我が海軍の將子ルソンは、ナポレオンの海軍を、一擊の下に。全滅して、一指をも、我が本國には、觸れしめませんでした。』『そこ等は、日本國と似て居る。』と申したのは、朝鮮人でなくて、今度は亞米利加人でありました。亞米利加人は、猶語を續ぎまして。『我々の祖先の國の、御自慢ですから。幾か伺つてもよろしいですが、大分うす暗くなりましたから、今日の議事は、此の位にして欲しいものであります。』と申しますると。『贊成々々。』と申す聲が、大分しましたので。遂に本日の議事を仕舞ふことに致しました。

二日目

二日目の朝、第一番に登壇しましたのは、亞米利加合衆國の人でありました。

其の温厚なる顔に、笑を湛へさせまして。『昨日は、終日各國の、御自慢を拜聽致しまして、大きに感心致しました。處が、今日は計らず、第一番に、我輩に番が回りまして。朝から、自慢を申上ることにありました。』といひながら、南北亞米利加の、諸國人を見渡しまして。『お負けに、南北亞米利加とも全体の、代表者でございますから、何れ下手の長演説に、伸び、欠びを、して頂かねばならぬことでありませう。』

と申しますると、其處此處で、笑ひ聲が起りました。『先づ亞米利加全体から申しますると、舊世界と比較べまして。何處となく、のび〳〵して居ります。日本君や、英國君の樣な、小さな島の中で、齷齪して居るのを見ますると、何だか、可笑しい樣であります。』英國人は。『都人と、田舍もの〻樣ですか。』と申しますると。『全くです、確に其の位の、差違はあります。ですから一体に、生活し易くて、優勝劣敗とかいふ樣な、忌はしいことも少なくて、他人の持つて居るものを、敲き落しても、拾つて食ふなどいふものはありません。』田舍ものは

何處の人も質朴で』と佛蘭西人が冷かしますれば。其の朴直ものを欺いて、土地を奪ひ、金銀を堀り、石炭を採り、木材を伐採し、魚貝を漁し、甚しきに至つては、人命財産を、損傷し、遂には其の國家をも、掠奪せうとするものがあります。』丁度、貴君が、黑人種たる、土人等に對すると、同一ですねえ。』と申したのは、フヒリッピン島の人でありました。『然し我が國は、强大なるが爲に我が國に對しては、敢て斯る非行をなすものはありません。が、他の米洲諸國に對して、間々斯ふいふことをなすものがありましたので、我が大統領モンロー氏は、若し米洲諸國に向つて、斯る非行を敢てするものあらば、我が合衆國は、之れに干渉せんことを、聲言しまして、一指だも觸れしめぬ樣に致しました。是れが即ちモンロー主義であります。』と申しますると。西班牙人は。『けれども、他國の領土は、掠奪するのですねえ。』と申しました。

『人物は又獨りモンロー氏のみならず、最初の大統領ワシントン氏はいふまでもなく、代々の大統領は、天下の輿望を擔つて、撰擧せられし一世の人物であ

りますから、一人として英雄ならざるものはありません。』

『其處で話は少し變りまするが、我が亞米利加合衆國の、强大富裕なることを申し上げませう。「愈々坐睡りの種になりますなあ』と申したのは英吉利人であります。『我が國は、英、露及び支那の諸君の如く、敢て土地の廣大を、誇るものでありません。が、其の廣さは、支那君に對して、余り讓らないのであります。』誇らないが、といつての御自慢ですか。』と申したのは、獨逸人でありました。

『殊に英吉利君の如く、種々雜多の諸國を、掻き集めたのでもなく。』『貴國も元は、我が雜多の國の、一つでありました』とは、英國人の言葉でありました。『又露西亞君の如く、大半不毛の地で、半歲雪に、埋れて居る地でもなく、支那君の如く、實際は、何處の土地やら、判然せぬ樣な、滿洲、西藏等の如きものはありませず。氣候は温和で、土地は膏腴で。其の上、大西、大平兩洋の間に位置を占めて居りますから、運輸は特に便利で、面積の上からは、世界の三

四位に居りましても、其の實質は、世界第一の大國といふべきであります。』と申しますると。『大國とは、土地の廣い計りでありますまい、露西亞君も、前に此の誤りがありました。』と申したのは、支那人でありました。人口の上からいひましても、矢張三四位に、居るのでありますが、其の增加の割合は、非常なもので、佛、英、獨、墺、伊、露、土、日、支、等の國々の人口は、現時の倍數になるまでには、少なくも六七十年以上を要しませう。然るに我が米國は二十五年を以て、倍數となります』と申しますると。支那人は。『幾等增殖しても、我が國と同一になるには、百年や二百年では、なれますまい。』と申しますると又。『支那國現時の人口を、四億とし、米國の人口を八千萬として、支那は百年、米國は二十五年にて倍數となるものとすれば、支那は百年の後八億となり。』

と申しますると。支那人は八億の數に誇つて。『米國は幾何になります。』と申しながら、迚も八億には達せますまいといふ顏付であります。『米國は二十五年の

後、一億六千萬となり、五十年の後三億二千萬となり、七十五年の後、六億四萬となり、百年の後は十二億八千萬であります。』と申して、支那人の方を見ますると、支那人は、違算でないかと疑つて居る樣子であります。『斯ふいふ譯でありますから、都府の人口も、非常の速力で、增加します計りでなく、只今でも紐育市は、ブルークリンを合すれば、殆んど英京ロンドンと、等しい程の、人口であります。況て此號數年若しくは十數年の後には、世界第一の都府となることを疑はないのであります。』

『自慢をしないといつて置いて、自慢をするのは、罪が深いねえ。』と申したのは、佛蘭西人であります。『其の他に、百萬乃至五十萬の都會の、澤山なことは世界中稀に見る處でありませう。『世界中第一等、といはない處に、愛嬌がある。』と申したのは、英吉利人であります。』『富裕といふ点から申しますると、是れは天下第一であることは、諸君に於いて異論はありますまい。』と申しますると、英吉利人は又。『イングランド銀行と、亞米利加銀行とは、何れが大きいでせう。』

と申しましたので。『イングランド銀行の、盛大なことは、昨日既に、拜聽致しました。が、全國の富といふ点から論じまするとと、我が米國の、右に出る處はありません。曾て或る統計家が、世界に於ける、五千萬圓以上の財産家を調べましたに、其の敷實に二百で、其の中百個までは、我が米國に有つたさうであります』と申すので、英吉利人は。『英國は如何ですか。』と申しました。『然し英吉利も亦殘り百中の六十を有つて居たそうでありますから、確に世界中第二等であるに、相違はないのでありませう』。『我が國には、幾つあるのだらう』。とは佛蘭西人の言葉であります。

『殊に我が國の財産家には、カーチギー氏の如き、一個人で十億圓に近い財産を有つて居るものも數人あります、十億圓といへば、少なくない金で、口でこそ十億圓でありまするが、國家としても十億圓の財産を有たぬ國は、澤山にあります。』と申して、論鋒を轉じ。『それで軍備の如きも、世界の何れの國にも、劣らぬ樣の準備は、出來ないではありませぬが、他國を侵畧しやうなどゝいふ

考はないのでありますから、自國の防禦と、モンロー主義さへ、行ふことが出來ればよいのでありますから、海軍は英國に。陸軍は、佛、獨、露、日等に及ばぬことは、自白して置きます。』と申しましたので。『其れは、先づ自慢でないですなあ。』と申したのは、獨逸でありました。『土地の廣大を誇らぬ、と申しましたので、自慢々々といふことが、大分攻擊の種になつて居りまするが、政治の完美は聊か自慢して置きませう、之れも昨日佛蘭西君から、いろ〳〵の御說明がありましたが、共和國の元祖とも申しまするのは、我が國であることも、御異論はありますまい。』

『英國より分離して、獨立する時、最も盡力したのは、何國でありますか。』と申したのは佛蘭西人でありました。『特筆大書して、大いに諸君に誇るに足るものは、現時の戰勝國。當議會の議長たる、日本君を、促して國を開かしめたことであります。』と申しまして大喝采の中に降壇しました。其の時丁度正午を報じたので、議長は暫時休會を告げました。

二日目の午後

二日目の午後には、大洋洲の人が登壇致しました。

『本洲は、北半球の諸君とは、大いに趣を異にして居ります。けれども、其の大樣は、米國君の述べられたのと、大差はないのであります。又其の軍備、教育、衞生等の事に至つては、我が母國たる、英國に寄つて、述べられてありますから、我輩は多く申しますまい。』と申して降壇しました。次に登壇しましたのは、埃及人であります。『我輩は、亞弗利加全洲の代表者であります。』と申して、壇上に立つては居りまするが、何となく萎れた樣子で。『地球上恐らくは、我が洲程、不幸なる洲はありますまい。我が洲には、眞正に獨立せる國といつては殆んどありません。あひしにあ帝國、もろつこ帝國こんご自由國は漸く獨立の体面を保つて居りまするけれども、それは甚だ微弱なもので、全洲を代表せる我輩と雖も、殆んど半屬國の境遇を免かれません。』と申して、概歎に堪へ

ぬといふ風で。『たまにトランスバールの如き、勇壯の國がありましても、遂に獨立することも出來ません。』と申して、胸が一杯になつたのですが、言語を出すことが出來ません。暫時く經過ちましてから。『たゞ我が國は、眞正に世界最古の國で、隨つてピラミットの如き、古物のあるのを誇る位のもので其の他にはナイル河の爲に土地を肥沃に致しまして、農夫は殆んど遊むで居ることが出來ます。』と申して少しく心を慰めたらしく。『どうか、亞米利加合衆國君の如き國が、我が洲にも出來て、モンロー主義だとかを實施して欲しいものであります。と申して降壇しました。

其處で日本人たる議長は、

『最早や全世界議員の、議論も盡きた樣でありますから、之れで閉會することに致しませう。』と申しますると。英吉利人は。『今日は未だ早いですから、議長が一場の演說を、希望します。』といひますると。『賛成々々。大賛成。』といふ聲が、諸方に起りましたので。議長は。『新進國たるの、我輩を推して、議長とせ

られしさへあるに、猶ほ演説を望まるゝ儀は、滿悅に存じます。然し我輩をして、説を演べしめんとならば、我輩の説の有らん限りを演べさせて頂きたい。」と申しますると。『無論だ。大いに遣るべし。』など申す聲を以て、場内を充たされました。

『然らば、我輩の演説は、明早朝よりすることゝせられたい、何故ならば、我輩の説は今日中に演べ了れさうにもないからであります。』と申すので、二日目は閉會しました。

三日目

今日は朝から、議長なる日本人の演説が、あると申すので、傍聽席までも、一杯で、一人も空席はありません。英吉利人は、日本人に代つて、議長席につき開會を告げますると、日本人は、最も沈着いた、態度で、登壇致しました。

日本人の演説

我が大日本帝國は、建國以來三千年であります。だから、諸君の中にも、大分御自慢でありました。古論から申しましても、我が大日本帝國は、余り遜色はないのであります。けれども、朝鮮及び支那の兩君の他は、是まで余り御存じがなかつた樣子で、殊に西洋の諸君に至つては、僅々四五十年前に、漸く御氣づきになつた計りで、今に日本の眞價といふものを、御存じがない樣でありますから、日本の歷史地理と順序にお話を申上たいのでありますが、之れを詳しく申上げて居ては、迚も一日や二日で、申上げられるものではありませんから、我が大日本帝國は、如何なる國体であるかを、お知り置きを願ふ爲に、一昨日來諸君が述べられた、諸君の御自慢の点と、我が大日本帝國とを、比較べて見まして、其の優劣は、諸君の御批判に、任じたいと思ひます。それで先づ歷史上から、國の新古を申しますると、埃及君、支那君、希臘君、印度君等隨分澤山の、門閥家も御坐りまするが、我が大日本帝國も、確に是等の國と、比肩すべき、價値のあるものと、我輩は信じて居ります。故に、露、獨、佛、英、

墺等の諸君の如き、讒かに壹千年の昔しに於いて、或る酋長に治められたのが國の始まりであるとか、何國と何國とは、また確固たる、國をなして居なかつたとか申すのとは、比較べものにはならないのであります。そして又我が大日本帝國の皇帝陛下は、代々聰明叡智に渡らせられまして、百二十余代の間、世界有名の帝王と比して、決して遜色あることはありません。露西亞君は、ピヨトル大帝を、空前絶後の帝王といはれましたが。我が大日本帝國には、申すも畏きことでありまするが。神武天皇の建國あらせられたるは申すまでもなく、神功皇后の三韓征伐。桓武天皇の蝦夷地開拓及び遷都。今上皇帝の清、露征伐等、啻にピヨトル大帝の如きのみではありますまい。

又皇族方にあらせられましても、日本武尊、護良親王等の御勇武、大鷦鷯尊、稚郎子皇子の御孝悌、廐戸皇子の御聰明にましまして、法學に長じさせ給へる。現時各宮殿下の御英邁に渡らせらるゝ等、是等も亦他列國に於いて、多く其の例を見ない處でありませう。英雄の下に弱卒なし、とか申されまするが、我が

臣民には、又世界第一流の英傑として、耻ぢざるものは、澤山であります、戰へば勝ち、攻むれば取る、佛帝ナポレオン一世の全盛時代にも比すべきは、我が豊太閤でありませう。太閤をして、若しも大陸に生れしめましたならば、啻にナポレオンの功業のみならぬ、大業を立てられたであらうと、我輩は信ずるのであります。又自重忍堪能く其の萬全の計をなしたるは德川家康で、米のワシントンにも比すべきでありませうか。

猶此の他にも、甲斐に武田信玄あり、越後に上杉謙信あり、毛利元就は山陽に、伊達政宗は奥州に、九洲の島津義弘、四國の長曾我部元親。黑田孝高、浮田秀家、佐々成政、石田三成、大谷義隆、島左近、直江兼繼、幸田幸村、木村重成、加藤清正、武藏坊辨慶、源爲朝、朝夷三郎、宮本武藏、岩見十太郎、賴光の四天王、賤が岳の七本槍、尼子が十勇士、新田の十六臣より、平家の二十四盛。赤穗に四十七の義士あり、閉塞隊には七十七勇士あり、小倉百人一首つゞを咏ぜし、歌人あれば、德川の臣には三百の諸侯あり、貴衆兩院には合せて八百の

議員あり、德川の旗元に至つては、實に八萬騎の多きあり。千早を圍みし北條の兵は八十萬にして、尊氏の率ゐて都に上りし九州の兵は、百萬でありました。現今九州には六百萬の人口あり、本洲には四千萬の人口あり、全國の人口は五千萬にして、神武帝以來の我が大日本帝國に生れし人口を數へますれば實に幾億萬の多きに上るでありませう。印度君の所謂五百羅漢の如きのみではありません。

土耳其君は又、ヲスマン、パシヤの勇壯を稱せられましたけれども、我れには鳥井元忠といふのがありまして、伏見の城に討ち死致しましたのは、ヲスマン、パシヤに勝るとも決して劣るものではありません。墺地利君の誇稱せられし、勾牙利人の外寇を防禦せる。又は露西亞君の御自慢のナポレオンを退却せしめしことの如きは、我が大日本帝國に取りましては珍らしいことではありませぬ、前にも述べました通り、二たび三韓を征し、琉球を降し、支那を膺懲し、露國を討伐して居りまするが未だ曾て他國の侵略を受けたことはありません。元の

忽必烈は、一度之を試みましたけれども、其の大軍を鏖殺せられまして、再擧の勇氣もありませんでした。之れを露亞西が鐵木眞の爲に攻畧せられて、二百年間其の羈絆を脫し得なかつたのや。又は勾牙利人に破られて、墺都維納を土耳其の爲に圍まれたのに比べますれば同日の論ではありますまい。英吉利君も亦、ナポレオンをして、其の土を汚さしめざることを御吹聽なさいましたが、然し一度は、外國の爲に征伏せられしことがありませう。獨り右等の諸君のみならず、天下に國をなす、諸君に於いて、萬系一統の帝室を奉戴することは固より、敵國の爲に、一度も其の國を汚されなかつた國はありますまい。只これあるは、我が東海の大帝國日本に於て、日の丸の旗の輝くのを見る計りであります。英吉利君は又、其の皇室の古いことを說かれ、世界無比とのことでありましたが、英吉利君の皇室は、英吉利建國の當時より、一系を以て傳へられたものではありますまい。處が我が日本大帝國の皇室は、人皇第一代神武天皇陛下が、大和に於いて、建國遊ばさせられし、幾百千年の以前より、

一統の御系を以て御傳へ遊ばさられましたのであります。猶言葉を換へて、申して見ますれば、世界が出來初めましたときから、我が日本の皇室がお出來になりましたのであります。皇室がお出來になりましてから後、臣民が出來ましたので丁度親があつて後、子が出來たのと同じであります。親子の情は天然に備り、子の親を啓し、親の子を愛するは、自然である如く、我が大日本帝國の、君臣の大義は、天然自然でありまして、君の臣民を愛撫せさせ給へるは、實に慈母の赤子に於けると異はないのであります。今之れが例証を擧げますれば、數へ盡されぬ程もありますけれども、最も世に顯はれました一二を述べて見ますれば。仁德天皇は、民の竈より立ち上る烟の少きを、御覽遊ばさられまして、下民の貧しきをしろしめされ、宮殿の破壞も厭はせられず、三ヶ年の租稅を免ぜさせられ、其の後高殿より再び民家を、お臨望み遊ばせられ、炊烟の繁きを御覽遊ばされましたとき。

高きやに、のぼりて見れば、煙たつ、

民のかまどは、にぎはひにけり

とおよみ遊ばされ、猶も三ヶ年の貢を許されましたので、宮中は益々破れまして、雨露さへ凌がれぬ樣になり、畏れ多くも陛下がお召の御衣さへも、其の粧ひ全からずなりました。けれども陛下は却つて之れを御樂み遊ばされまして

『民の富は、朕が富なり。』

と仰せられました、

我が忠順なる國民は、此の有り難さ、御樣子を拜し奉り如何に其の儘打ち過ぐべき道理の有らう筈はありません。國々の人民各集り、大宮を作り、御調を備へ奉りました。

醍醐天皇は又、厲精政を遊ばさせられまして、人民を哀み給ひ、寒夜御衣を脱して、人民の凍餒を察せられ給ひましたことがあります。

後鳥羽天皇の。

夜を寒み、ねやの衾の、さゆるにも、

わらやの風を、思ひこそやれ。

世治まり、民安かれと、祈るころ、
我が身につきぬ、思ひなりけり。

の御歌の如きは、皆人民を御思ひ遊はされる大御心の表はされたものであります。

今上天皇陛下も亦。

冬深き、ねやの衾を、重ねても、
思ふはしづが、夜寒なりけり。

とよみ給ひ。皇后陛下も。

あや錦、とり重ねても、思ふかな、
寒さおほはん、袖もなき身を。

とよまれましたが。國の爲め、民の爲めに、腦ませ給へる、大御惠の程が知れ

後醍醐天皇の。

るのであります。

又臣民のもの等も、君に忠を盡し、皇室を尊崇致しますることは、赤子の父母に於けると同一であります。是等の例も亦、枚擧に遑ありませぬが、矢張一二の事蹟を述べて見ますれば。楠正成は後醍醐天皇の、笠置に幸し給ひし時召されてより、孤獨の兵を以て、北條の大軍を破り、遂に之れを亡ぼし。尊氏の凶勇を以ても、正成の生存中は、如何することも出來なかつたのであります。曾て赤坂に籠りましたときに、僅々五百の兵を以て、敵の六十三將十余萬の兵を防ぎましたが、城内糧食盡き、外に援兵來らず、討死の他爲すべき手段はありませんでした。正成は。

『吾れは天下に率先して、大事を擧げたのであるから、固より生を期して居ないのである、けれども天皇猶在ませば、吾れはまだ死ぬことは出來ない。』

を申しまして、窃に遁れて金剛山に入りました。滿場の諸君、諸君の國に於いて、忠臣と稱せられ、勇將と譽められ居る軍人は、戰ひ勝つに非らされば、潔

く討死するを、此の上もなき功勳として居るのでありませう。我が正成は是と異つて、死は期する處なれども、陛下のあらせられる限りは、吾れは死すべからずといふのであります。吾が身の生死は意に介せないのであります。心中只陛下あるのみであります。斯る誠忠潔白のものは、我が國の他にありませうか。

其の後遂に北條氏を亡ぼし、足利尊氏の反して、九州より攻め上りました時に、正成は、策を献じましたが、朝議之れを用ゐることが出來ませんでした。けれども、正成は不平の色もなく、出でゝ兵庫に防ぎましたが、衆寡敵せず、遂に湊川で討死致しました。其の時弟正季に申しまするに。

『人間に七生して、國賊を殲さん。』

とのことでありました。それのみならず、兵庫に赴かんとするの途中櫻井の驛に於いて、吾が子正行を、膝近く呼びよせ。『父は今より兵庫に國賊を防がんとするのである。が、敵は吾が軍に數十倍せる大軍なれば、迚も再び汝を見ることは出來ない。吾れ死せる後は、世は尊氏のものとなるであらう。去りながら、

吾が宗族のもの一人たりとも生き殘りて、陛下の御心を安んじ奉るものがなくてはならぬ。汝は猶幼いけれども、已に十歳を過ぎたれは、必ず吾が言を記臆して、義を忘れ利に嚮ふ樣なことがあつてはならぬ。』と申して、鄕國河内へ返しました。諸君、正成は、忠義の爲には、吾が身の生死を、念頭に置かぬ計りでなく。其の子の生死も、思はないのであります。獨り現世の吾が身と、吾が子の生死を思はない計りでなく、人間に七生してまでも、忠義を盡さんとするのであります。正成が、爲せし行なひも實に立派でありまするが。其の心中の赤誠に至つては、又一段のことであります。諸君、諸君の御國に於いて、斯かる忠臣はありませうか。其の他此の時代のみでも、新田義貞、名和長年、兒島高德、北畠顯家、菊地武時、土居通治、得能通言等の忠臣があります。斯の如き誠忠の人は、獨り將校のみに存するのではなくて、一兵卒と雖決して變りはありません。

明治十年の役に、熊本城を守りし谷少將は、城内の急を本營に報ぜんとて、其

の卒谷村計介に命を授けました。計介は命を受け、城を出でしに、忽ち賊の爲に捕ふる處となりました。計介は、守卒の眠りを伺ひ、爪を以て繩を切り、潛に逃れましたが、不幸にも再び捕へられました。計介は、伴つて懦夫の狀をなし、股栗し涙を垂れ、許されんことを賴みました。賊は之れを憫みまして、擔夫と致しましたので、計介は、間を見て逃れ、遂に使命を全く致しました。其の捕へられました時は、賊の爲に拷掠せられまして、苦楚を極めたのであります。けれども忠實勇敢なる彼は、遂に其の實を吐きませず、其の目的を達したのであります。本營にては、其の功を賞し、甚た厚遇致しまして、本營内に休息せしめましたが、田原坂の激戰の時、計介は、又も、戰隊に列せんことを請ふて已みませぬので、之れに傳令の事を命じました、其の時適ま、我が軍の敗となりましたので、計介は大いに怒りまして、他人の銃を奪ひ、單身叱咤賊壘に入り、銃彈に中つて斃れました。

諸君、貴國等の兵卒に計介の樣なものはありませうか。一度斯る大功を立つれ

ば、思ふ處の勳章を得、充分の名譽を得て、一生安樂に其の身を誇ることが出來るのであります。それを再び戰隊に列せんを乞ひ、勇進彈丸に中つて死す。斯る兵卒は、日本の外に見られない處でありませう。是れ我が大日本帝國の軍人は、一兵卒と雖、陛下と國家あるを知つて、我が身を思ふの遑がないので斯る行ひが出來るのであります。我が大日本帝國の兵卒は、獨り計介のみならず、總て斯ふいふ風なのであります。諸君も知らるゝ如く日露戰爭の際の如きは殆んど數へきれないほどありました。

是等のことは、前へにも述べました通り敎へて後、然る所以を知るのではありません、自然に天より附與せられたる我が國民特有の性情であります。

例へて見ますれば、彼の無智にして、ものゝ道理を解しませぬ、禽獸蟲魚等にても、猶其の子を愛し、其の親を慕ふ樣なものでありまして、我が大日本帝國の、君臣の大義は、天性であります、陛下が慈愛の大御心も、臣民が忠義の至情も、皆是れ日本君民の特有であります。そして又、我が大日本帝國の民は。

『普天の下、卒土の濱、王土に非ざるはなし。』との格言を腹膺して居りますので、若し之れを侵し、之れを汚すものがありましたならば、舉國死を以て守防するのであります。又之れが難に趣きまするものは、假令自己の家庭に如何なる困難のことがありましても、其れを口實として、辞退する樣なことはありません。『王事を以て家事を辞し。家事を以て王事を辞せず。』とは、實に我が大日本帝國民の、狀態を寫し得た言語であります。

我が志士梅田源次郎は。

妻臥病床兒叫飢　此心偏欲掃戒夷
今朝死別兼生別　只有皇天后土知

と歌ひまして、征途に出立致しました。

是れを他列國の。時を得たる豪傑の、強いて國家を掠め、王位を奪ひて、帝王と稱せる。昨の白面書生の一朝風雲に乘じて、皇帝となれる。清朝は、我曹の仇讎なり、之れを亡ぼさずんば、我が國家を如何などといふ、漢民のある支那

國。皇帝の臨幸を待つて、危害を加へ奉らんとする國民のある露國。聚斂苛酷なる、皇室を有する土耳其國等は申すまでもなく。歐州の門閥家を以て自任せる墺國。皇室の尊嚴比類なしと自稱せる英國にても。其の源に溯れば、皇室と人民とは、互に仇敵にてありしものに比べますれば、其の差違啻に、月鼈の如きのみではありますまい。

故に我が大日本帝國には。他の列國の如く。舊帝室亡び、新帝室の起らせ給ふ毎に被る處の、悲慘酷烈の禍もなく。幾萬無辜の生靈を鏖殺し、坑鏖し、至尊を縛し奉りて、斷頭臺上の露となし。后妃を捕へて暗黑牢内に投ぜしが如き、殘暴豺狼の行ひもなく、帝王の尊きを以て、永く不祀の鬼とならせ給へる如き悲哀のこともないのであります。それのみならず、我が大日本帝國民には、大和魂なるものがありまして、天皇に誠忠なることは、前述の通りでありますが、又父老尊長にも柔順孝悌で、幼弱卑賤は庇護愛撫し、義俠勇武で、義の爲に死ぬことは、眠りに就くよりも、容易く思つて居るのであります。さうかと申し

て又優美の風もありまして、物の憐れを解して居りまするのであります。特に正直廉潔なることは天性でありませう。斯ふいふ譯でありますから、我が國民の忠君愛國の至情は、日本以外の各國人には、想像にも、理想にも畫き能はざる處で、隨て國家の强固なることも、我が國人の他は、思ひ及ばぬことでありませう。佛蘭西君及び亞米利加君等の如きは、頻りに共和政体の善美を稱へられましたが、其れは適當の君主がないので、止むを得ず斯かる、國家を創建せられたものでありませう。若しも我が大日本帝國の如き、完全なる君臣の大義を備へて居る國体を、見たり聞いたりしたならば、恐らくは羨望に堪へぬでありませう。假りに我が國の如き、尊嚴貴重の皇帝を戴くことを得るとするならば、共和政体を變じて、立憲帝政となすことに、躊躇せないことでありませう。序に露西亞君の申されました、白黃人種のことに就いて、一言申し上げたいのであります。白人種中でも、露西亞は、最優等であるとのお說は、獨逸君の爲に、說破せられましたから、それはよいとしまして。白人種は、黃人種よりは、

高等の人種である、といふことに就いて、一言致しませう。白人種優等との說は、現時白人種の國即ち歐米諸國は、黃人種の國即ち亞細亞諸國よりは、文明の域に達して居るといふので、唱ふる譯でありませうが。現時とて我が大日本帝國の如きは、決して劣つて居ないことを信じます。けれども、黃色人中、文明の域に達して居るのは、日本計りで、白人種中には幾多の文明國があるといふので、白人種優等說でありますならば。現時は黃色人は、白色人に一歩を讓つたものと致しませう。が、今より數百千年前、即ち支那君、印度君の御自慢である、孔子、釋迦等の時代には、白人種よりは、黃人種を優等人種とするの至當であつたことを、想像するのであります。されば一時の盛衰を以て、直ちに優劣を論ずるの不可なることが知れまする。況して、色の白黃のみを以て、理由もなく、漫りに白優黃劣を唱ふるの不可なること知るべきのみであります。黃白を以て、漫然斯る說を吐かんとならば、金は黃にして尊く、銀は白にして、金に劣るとの黃優白劣論を唱ふるに、若かざることゝ存じます。支那君、露西

亞君、英吉利君及び亞米利加君等は、土地の廣大と、人民の多數を、誇られましたが。支那君の如き、國家の觀念もなく、愛國の熱情もなく、其の上現皇室を敵とせる、多大の漢人のある國に於いては、如何に其の頭數の多きを誇ると も何の益にもならぬことでありませう。況して其の國内、蒙古、西藏、滿州等の半獨立國と分離せるに至つては、國の廣大も人民の多數も害あつて、益なきことかと思はれます。露西亞君の如きも亦、稍々支那君と同じき境遇にあり、殊に其の雜多の人種を有するは、支那君にも增して、一層危險のことでありませう。其の上、寒帶にして、不毛の地多く、飢に叫べる困苦の人民は、多數を有せんよりは、却つて少數の勝れを思はしむのであります。英吉利君も亦、其の本國に幾十百倍せる、許多の領地は、何の時、何の處より反乱を企つるやも計られず、之れあるが爲に枕を高くして眠る能はずとすれば、寧ろ速に放棄するの勝れるに若かざること丶存じます。

亞米利加合衆君は、稍々强國の樣でありますけれども、其の年々移住する處

の、各國の人種は、益々繁殖して益々雜多となり、若しも同化するの力を失することがりあましたならば其の害甚だ恐るべきものであらうと存じます。

是れ等の理由を以て、我が大日本帝國の運命を考へて見ますると、是等の國に比して數十分の一にも足らぬ土地と、數分の一に充たぬ人口を持て居る計りでありますが、却つて其の安全强固なることの幸福を喜ぶのでありまする。伊太利君は、宗教の本山と、氣候の温和と風景等を以て、他國の學ぶ能はざることゝ申されましたが、宗教の本山を有するを以て、誇り得るは、歐米人に對してのみのことにて、東洋佛教の國に於いては、却つて印度を本山とするのであります。我が大日本帝國に於いては、京都に東西の本願寺あり、紀伊に高野山金剛峰寺あり、越前に永平寺あり、其の他の本山數ふるに遑あらざる程であります。地の温和、風光の明眉に至つては、我が大日本帝國の國体と共に、世界各國に秀絶せる處でありまして、其の位置は、温帶圈内にあり、東南は大平洋の暖潮を受け、冬時雪を見ず、夏時汗を知らざる地に乏しからず。三景の風色

は申すまでもなく、和歌の明光、金澤の八景、須摩の浦、舞子の濱、近江に琵琶湖あり、駿河に富士山あり、至る處として白沙青松の地でない處はありません。特に春日艶妖の時に於いて、吉野の如き嵐山の如き、又は上野、向島、飛鳥山等の如きに遊びましたならば自ら羽化せるかを疑ふのであります。又月が瀬の梅花、半開を報ずるの時、月明に乘じて樹下に逍遙しましたならば、實に仙境にあるを思ふのであります。要するに、伊太利國も亦一の樂土に相違なきも、我が日東の樂園たる大日本帝國に比し、恰も小公園と大公園の如き差があります。英吉利君の誇られました商工業及び之れが機關たる銀行業。亞米利加合衆君の演べられました裕福といふ点から申しますると、遺憾ながら我が國は一歩を讓らねばなりません。が、我が大日本帝國は、海陸自然に富饒でありまして、海には各種の魚族群をなし、又鯨、臘肭臍、臘虎の如き海獸もあります。山には檜、松、杉、桐の良材を出し、楠は其の特有であります。米、麥、砂糖、木綿、豆、桑等は田園に耕作し、礦物は、佐渡に金を出し、生野に銀を産す、

足尾の銅鑛、幌内、高島、三池等の炭坑は最も著名のものであります。蓋し日本の如き山岳に富み、特に火山に富む所に於ては、鑛物の地下に埋れて居ることは、自然の理でありませう。

地勢も亦、四面環海なるが故に、交通最も便利で、東洋貿易の中心市場となるべき地位にあるのであります。斯かる豊富の國を以て、斯る地勢を占めて居りまするが、我が大日本帝國は、古來農業を以て立國の基とし、民に耕作を勸むるが如きは、上古より朝廷の尤も勸め給へる所でありましたので、身は皇族の貴きを以てして、親ら地方を巡り、民に耕稼播種のことを敎へ給へることすらありました。それで農政は、政治上樞要の部分を占めて居りましたので、歷代の政事家も亦大概農を重じまして、商工の如きは少しも顧みませんでしたので、農業のみ著しく發達しまして、現今より數十年前までは、全國の人口の過半は純全たる農民でありました。その上德川氏の代になりましてから、鎖國の主義を執りましたので、久しく世界を知りませず、又世界にも知られませんでした

ので、猶更農業のみ發達致しまして商業はさつはり震ひませんでした。

けれども、我が大日本帝國の內地は、山岳丘陵相連續して居りまして、農業には適當の地でありません。是等の失敗は即ち現時商工業及び富の程度に於いて英米等に一歩を讓らねばならぬ原因となつたのでありませう。元來我が帝國民は、因循のものでもなく、又區々たるものでもありません。現に山田長政の如きは、暹羅に於いて大功を顯し、三百年の古へに於いて、帝國外三千里の地に日本街を建設したことがあります。當時支那海岸を掠め、倭夷の名聲彼の國人を戰慄せしめしこともあります。是等は皆、木葉の如き偏舟に乘じて、大膽にも渡海せしものであります。其の後伊達政宗の如きも、羅馬法王に音信を通じて、私かに千萬里外に雄圖を伸さんとしたこともあります。今や我が大日本帝國は、船渠を出でゝ、大海に浮びたる船舶の如きものにて、之に乘れる船員は、長政の如き政宗の如き、有爲活潑のものであります。又積み込みし貨物は、前述の豐富の國產でありますから、小波大濤を衝いて、縱橫自在に天下を馳走し

帝國の商工業を發達せしめ、帝國の富裕を增進し、遠からずして英米諸君の上に出づることを我輩は確信するものであります。亞米利加合衆君は又、モンロー主義を以て、米洲諸君を保護すとのた話しでありましたが、其の任俠正義には實敬服の外ありません

我が大日本帝國は、又君の爲に例の銷港の誤りを知り、國を開いて今日の位置を得たのでありますから、君の行爲に習つて、支那を導き、朝鮮を保護し、以て東洋諸國の盟主とならんことを期するものであります。と演べまして、論を結びました。そして終りに臨んで滿場各位の健康を祝し、併せて世界各國の平和を祈ります。と申しまして、大拍手大喝采の中に降壇致しました。副議長の英國人は、閉會を告げまして、無事散會致しました。

尊い日本 畢

明治三十八年二月廿日印刷
仝年三月一日發行

定價金拾五錢

著者　岡本三山

發行者　魚住嘉三郎
東京市日本橋區大傳馬鹽町十七番地

印刷者　大嶋寛治
東京市神田區表神保町十番地

複製　不許

發行所　東京市日本橋區大傳馬鹽町十七番地　魚住書店

特約販賣
東京市日本橋區鉄砲町三番地　榊原文盛堂
仝市神田區美土代町三丁目　富田文陽堂
東京市日本橋區大傳馬町二丁目　淺見文林堂
東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店

東京
靖國
文庫藏